

形状知覚における主体と客体

池知 翔太郎 (Shotaro Ikeji)

東京大学

特殊相対性理論（以下 STR）以前の哲学において、Euclid 幾何学は、物理的宇宙と知覚の双方の枠組みであった。Euclid 幾何学的性質は物理的宇宙の中の対象によって例化されており、形状経験も Euclid 幾何学的性質の例化を表象している、と想定されていたと思われる。STR 以後、物理的宇宙は Minkowski 時空として捉えられるようになった。すると、我々の形状経験の真正さが脅かされるのではないかという懸念が生じた。というのも、Minkowski 時空においては空間的次元が時間的次元から切り離されていないから、物理的宇宙の中の対象によって Euclid 幾何学的性質が単純に例化されている訳ではないのではないかと疑われるようになったからである。形状知覚の真正さを確保するために、どのような新しい説明が可能だろうか？

文献の中で、STR と知覚の関係についての目立った見解は、David Chalmers の形状機能主義である。形状機能主義は、我々の形状経験が何であれそのような形状経験を通常引き起こす性質を表象するという見方である。形状機能主義は、形状提示主義と対置されてきている。形状提示主義は、我々の現象的に同一な形状経験が常に同一の性質を表象するという見方である。Chalmers(2019)は、次のような双子地球思考実験を考案することによって、形状提示主義ではなく形状機能主義を採用しなければならないということを示そうとした。地球と物理的に同一な複製であり地球との相対速度が光速の約 87%である双子地球（以下 Lorentz 地球）を想定せよ。STR に従うと、Lorentz 地球の運動方向に、Lorentz 地球上のあらゆるものの長さが $1/2$ に「収縮する」ということが観察されるだろう。（運動方向と形状の位置関係によっては）Lorentz 地球人達が正方形と呼ぶものは、長方形である。他方で、地球人達が正方形と呼ぶものは、正方形である。Chalmers は、この思考実験を踏まえると、形状提示主義は維持できず、我々の形状知覚の真正さを確保するためには、形状機能主義を採用しなければならないと主張する。だが、形状機能主義の下では、我々の形状経験によって表象される性質は必ずしも Euclid 幾何学的性質ではないということになってしまうだろう。しかし、それはもっともらしくない。

他方で、Epstein(2018)は、形状知覚の真正さを次のように確保しようとする。上のような思考実験においても、物理的宇宙の中で Euclid 幾何学的正方形性が双方の知覚者の系にそれぞれ相対的に例化されているから、形状提示主義は維持可能であり、STR の下でも知覚の真正さは失われていない。しかし、このような仕方で形状提示主義を擁護することは、我々の形状経験が錯覚であるかもしれないという疑いを払拭するには足りない。というのも、このような形状提示主義によると、物理的宇宙の中で知覚者の系以外の系にのみ相対的に例化されている性質が知覚者によって表象されないことになるが、すると知覚は知覚者の系以外の系に相対的には依然として錯覚と評価さ

れるべきなのではないかという疑いが残るからである。もしこれが正しければ、形状提示主義によって擁護されているのは、高々知覚が知覚者の系に相対的に真正であるということにとどまり、STRの出現によって脅かされていると思われた知覚の真正さは、実際に、ほとんど失われていたことになる。そうであるとすれば、これらの見方とは異なる他のアプローチを探究することが課題であるだろう。

上のような形状提示主義の問題は、知覚者によって表象される性質が知覚者の系に相対的に例化されているものに限定されていることに存する。逆に、相対的に例化されていると知覚者によって表象されうる性質の集合が知覚者の系にかかわらず同一であれば、Euclid 幾何学的性質の系に相対化された例化が形状経験によって表象されていると想定しつつ、系に相対化されない真正さを知覚に確保することができると思われる。しかし、そのためには、知覚者の系以外の系にのみ相対的に例化されている性質についても、知覚者の形状経験がそのように例化されていると表象しうるということを肯定することが必要になる。だが、知覚者の系に相対的に例化されていない性質でも形状経験が表象しうるということは、説得的だろうか？

本発表は、形状経験が表象しうる性質の相対論的範囲を考察するために、比較的単純な問題を類比のために持ち込む。それは、形状に関する次のような古典的問題である。ある平面に円を描き、描かれた円を斜めから見るということを想定せよ。その際にどのような図形が見えるだろうか。円を描いた以上、依然として円が見えるようにも思われる。他方で、楕円であると言いたくなるような何らかのものが現れているようにも思われる。こういった場合に、どのような形状が知覚されていると考えるべきだろうか。より一般的に語れば、これは、我々が三次元空間の中で平面図形を把握するとき、平面図形の見かけの形状が、我々が知覚することを期待する形状と必ずしも一致しない場合があるのではないか、という問題である。このような見かけの形状の問題は、上の相対論的問題と、何らかの共通の構造を持っていると思われる。というのも、どちらの問題においても、複数の次元のうちで特定の一つの次元が捨象されることによって生じる知覚的現象が考察されているからである。したがって、二つの問題の類比が、形状経験の本性を明らかにするための手がかりを与えるものと思われた。古典的問題においては、例化されていると知覚者によって表象されうる性質の集合が知覚者の位置にかかわらず同一であるということは説得的に論じられうるものであり、その事実が相対論的問題における類比的な見方を説得的にするとと思われる。本発表は、これらの二つの問題の類比を通して、形状に関する知覚と錯覚についての統一的な描像を提示することを試みる。

参考文献

- Chalmers, D. (2019). Three puzzles about spatial experience. *Blockheads*, 109-137.
Epstein, P. F. (2018). Shape perception in a relativistic universe. *Mind*, 127(506), 339-379.